第10回夏期福音特別集会（3）（御岳駒鳥荘）
聖霊の突破
――使徒行伝第18～19章――

1963年8月24日
小池辰雄

福音の中から告白　体見　霊子　第三次伝道　聖霊のバプテスマ　使徒的信仰　キリストの名によりて　聖霊の突破　十字架の突破口　御霊の愛

【使徒18】

……24時にアレキサンドリヤ生まれのユダヤ人にて聖書に通達したるアポロと云う能弁なる者エペソに下る。25この人はさきに主の道を教えられ、ただヨハネのバプテスマを知るのみなれど、熱心にして詳細（つまびらか）にイエスの事を語り、かつ教えたり。26かれ会堂にて臆せずして語り始めしを、プリスキラとアクラと聞きいて之を迎え入れ、なおも詳細（つまびらか）に神の道を解き明せり。27アポロ遂にアカヤに渡らんと為（し）たれば、兄弟たち之を励まし、かつ弟子たちに彼を受け容（い）るるように書き贈れり。彼かしこに往き、既に恩恵（めぐみ）によりて信じたる者に多くの益を与う。28即ち聖書に基き、イエスのキリストたる事を示して、激甚（ていた）くかつ公然（おおやけ）にユダヤ人を言い伏せたるなり。

【使徒19】

1斯（かく）てアポロ、コリントに居りし時、パウロ東の地方を経てエペソに到り、或る弟子たちに逢いて、2『なんじら信者となりしとき聖霊を受けしか』と言いたれば、彼等いう『いな、我らは聖霊の有ることすら聞かず』3パウロ言う『されば何によりてバプテスマを受けしか』彼等いう『ヨハネのバプテスマなり』4パウロ言う『ヨハネは悔改（くいあらため）のバプテスマを授けて己に後（おく）れて来るもの（即ちイエス）を信ずべきことを民に云えるなり』5彼等これを聞きて主イエスの名によりてバプテスマを受く。6パウロ手を彼らの上に按（お）きしとき、聖霊その上に臨みたれば、彼ら異言を語り、かつ預言せり、7この人々は凡て十二人ほどなり。……

●福音の中から告白

『曠野の愛』（24号、1956年春季号）の前の方に、私は詩歌をいくつか詠いましたが、

○　聖霊の身証（あかし）に神の栄光（はえ）ありし

使徒の昔を今日も明日（あした）も
○　すさまじき聖劇（オラトリオ）なる聖書（みふみ）なれば
　その現実に投身（なげみ）して読む
○　贖はれし五臓六腑に注がるる
　み霊の生命限りあらなく
○　主に在れば信行（しんぎょう）一如の生命（いのち）なり
　観念に非ず御利益に非ず

今晩からこの集会にお臨みになる方もあります。また、本当に新しく私の話をお聞きになる方もありますので、一言申し上げておきます。

私たちは、「キリスト教」と申しませんで、「福音」と申します。私は、

「キリスト教という言葉が躓きになる、それが観念化する原因である」

と思うのであります。また、「聖書研究会」というようなのが方々にありますが、これも躓きになる。キリストは、「喜びの音信（おとずれ）」と言われる。私たちは、「キリスト教」じゃない。福音、喜びの音信と言う。喜びの音信は、キリストが語った事柄ではない。キリストそのものであり、かつまた、キリストそのものから発しているところの一切のものである。それが、「福音」というものである。マルチン・ルターですらも、

「福音書の中にキリストについて書かれてある」

なんてな言い方をする。について書かれてあったり、について研究してみたり、について語ってみたって、それはダメなんです。私は、

「福音について」

絶対にお説教はいたしません。

「福音の中から」

告白をいたします。皆さんも、福音の中へと読み入る。

ドイツ語に、

「in dem Buch lesen」「本の中で読む」

という言葉がある。その表現は要するに、本を開いて読むということなんですけれども、もっと根源の生まの意味で、「本の中で読む」というような気持。いや実に、「中で」という感覚ではなくて、「中へ」と「in das Buch lesen」と、そういうドイツ語はありませんけれども、「本の中へと読み」込まなければならない。

●体見

「デム・クレアトール・スピリトゥス」

「創造者の霊よ、来たりたまえ」

という。私たちの中には創造者の霊が来まして、福音書の中へと読んでいくと、その中か

ら根源の言葉が湧き出てくる。もう文字にはとらわれない。昔は、集会とか何とかというと、私は一生懸命で準備して、そして、そこからものを言っていた。それは捕らわれる。書かれたる自分のものにとらわれる。それではダメなんだ。聖書は、ギリシヤ語だって、ヘブライ語だって、日本語だって、何だっていい。眼光紙背に徹すると言いますが、その文字の奥から――ちょうど音楽が万国の言葉であると言われるように――音楽よりももっと素晴らしい万人への言葉が、根源の万人への言葉が皆さんに語りかかってくる。それを聞こうとして、読むのである。聖書は、そうなったら、無尽蔵の世界でありまして、読むごとに、その受けとるものが新鮮であり、新しい。何と不思議な本であろうか。いわゆる学者が研究するのよりかはるかに、キリストはそのようにして旧約を読まれた。使徒たちはそのようにして旧約を読まれた。私たちはそのようにして全聖書を読むべきであります。どうか、古きも新しきもない。皆さんも、この角度に、勇敢にその角度をもってぶつかる。始めの角度がちょっとズレていると、先の方の距離は大きくなってきますから、始めの角度をしっかりと、この気合でもって臨んでいただきたい、ということを申し上げるわけであります。

それから、昨日、私は――新しい方がいらっしゃるので一言しておきますが――

「体見」

ということを言った。未だかつて使わない言葉です。体（からだ）で見るということ。これは、パウロがダマスコ途上で復活のキリストに撃たれた。そして、

「我が目より鱗の如きもの落ちたり」

という、あの回心の事態。あの回心の事態は、復活のキリストを――それは霊的現象そのものも凄いでしょう――けれども、彼自身が、本当に全存在をもって、体（からだ）をもって見奉った。体（からだ）をもって見たので、目で見たんじゃない。これが、パウロがキリストを見た、ということ。

●霊子

また、今日は午前の集会で、

「霊子（れいし）」

ということを語りました。今は、原子力の時代で、素粒子だとか電子だとかいろんなやつが、非常な問題になって、それで回転しているような文明であります。けれども、私たちには、素粒子やまたその中の電子というようなものも大切でしょうけれども、もっと大切な「霊子」というものがある。この「霊子」は、もちろん、

「み霊の一粒の芥種の如き信」

という、「芥種の如き信」というものが、私たちの中の霊というもの。これが、私たちの中にあるならば、どんな物理的な力ある原子よりももっと凄い爆発力を持っている。生命力を持っている。この「霊子」が、そこに書きましたように、「天下を覆すもの」である。パウロが

「天下を覆すもの」

と、みんなに驚かれたけれども、パウロが偉いんじゃない。パウロの中にいた、この「霊子」が凄い。この「霊子」が、天下を覆すような驚くべき原始力をもって、あの、地の極までも世の末までも、と言って、パウロが突進して行ったところの、この伝道の源動力である、本体である、ということを学んで参りました。

●第三次伝道

これから、パウロの第三次伝道のところに入っていくわけです。使徒行伝の第18章24節。今日と明日で、第三次伝道を終わるわけです。

24時にアレキサンドリヤ生まれのユダヤ人にて聖書に通達したるアポロと云う能弁なる者エペソに下る。25この人はさきに主の道を教えられ、ただヨハネのバプテスマを知るのみなれど、熱心にして詳細にイエスの事を語り、

まぁ、この場合は、人間的な熱心であります。

かつ教えたり。26かれ会堂にて臆せずして語り始めしを、プリスキラとアクラと聞きいて之を迎え入れ、なおも詳細に神の道を解き明かせり。

「プリスキラとアクラ」というのは、非常にパウロの善き味方になった人であります。福音の、これは正に体現者です。

27アポロ遂にアカヤに渡らんと為たれば、兄弟たち之を励まし、かつ弟子たちに彼を受け容るるように書き贈れり。彼かしこに往き、既に恩恵によりて信じたる者に多くの益を与う。28即ち聖書に基き、イエスのキリストたる事を示して、

イエスが本当の救主であるということを、イエスが神の真にみ霊注がれたる者であるということを、です。「キリスト」は、ヘブライ語でいうと、「メシヤ」ということですね。本当のメシヤです。

激甚くかつ公然にユダヤ人を言い伏せたるなり。

まぁ、素晴らしいことであります。19章です。

1斯てアポロ、コリントに居りし時、パウロ東の地方を経てエペソに到り、

エペソには2年間いたわけですね。

或る弟子たちに逢いて、2『なんじら信者となりしとき聖霊を受けしか』と言いたれば、彼等いう『いな、我らは聖霊の有ることすら聞かず』3パウロ言う『されば何によりてバプテスマを受けしか』彼等いう『ヨハネのバプテスマなり』4パウロ言う『ヨハネは悔改のバプテスマを授けて己に後れて来るもの（即ちイエス）を信ずべきことを民に云えるなり』5彼等これを聞きて主イエスの名によりてバプテスマを受く。6パウロ手を彼らの上に按きしと

き、聖霊その上に臨みたれば、彼ら異言を語り、かつ預言せり、7この人々は凡て十二人ほどなり。

ここに、非常に鮮やかに、み霊のバプテスマのことが書かれてある。今のクリスチャンも、何によってバプテスマを受けたかと。教会でやっていらっしゃるのは、みんなヨハネのバプテスマ、水のバプテスマでございます。そんな形式は要らん、と言って無教会ではバプテスマはしない。無バプテスマ。私たちは、水のバプテスマでもなければ、無バプテスマでもない。使徒たちのバプテスマに向かっているわけです。

●聖霊のバプテスマ

私は、本当にそのことを聞かなかった。ここに無教会の限界がある。使徒行伝の、聖霊行伝のこの現実は、この聖霊のバプテスマなくしては、絶対に起こってこないところの現実である。いや実に、イエス・キリストの福音そのものが、聖霊のバプテスマなくしては絶対に起こってこないものである。それほど決定的なもので、み霊のバプテスマというものは、これは今20世紀の後半におけるキリスト教界の問題中の問題で、焦眉（しょうび）の問題であるということを、私はハンブルクで絶叫したんです。

聖霊のバプテスマは、正に天来の嵐のようなおとずれである。何も、それは珍しいことではない。みんな、そのことは神学者も教会の牧師さんも、みんな知ってらっしゃる。けれども、それが真剣に現実とされていない。私は、その講演の中でも言ったのでありますが、ブルンナーという学者が、その畢生（ひっせい）の大作の『ドグマティーク』という三巻の本の第三巻の所に――非常に第三巻はいい本ですが――

「今までの神学は聖霊のことをおそまつにしていた。このことが即ち今までの神学の欠陥で、継子（ままこ）扱いにしていた」

ということを嘆いている。気が付いて、そのことを言っている。聖霊のいわゆる論理を超えたところの、超論理の現実というものに対して、今、非常に目が盲になっている、目が見えなくなっていると。こういうクリスチャンは目あき盲である、とこういうわけです。

そういうわけで、私たちは歴史的に重大な所に立たせられている。無教会の姿を大体知っているところのグンデルト先生は私に、非常にご丁重な、また心をこめた手紙をくださって、本当に同感だ、というのであります。

キリスト教界に、ひとつの課題が上から来ている。

「聖霊は言いがたき嘆きをもって呻きたもう」

とロマ書8章26節に書いてある。あれは私の集会の壁に、私の兄貴が英語で書いたのを額にしてあります。

「聖霊言い難き嘆きをもて呻き執成し給う」

という。

聖霊が呻いている。今のキリスト教会は何ごとであるかと。パウロたち、それから世々の殉教の死をもって福音を証していった多くのひとたちの、この本当の教会、本当のキリストのエクレシア、これの天使たちが呻いている。天の万軍の祈りが上からかかっている。

●使徒的信仰

私たちは、ただ地上で小さな集会、小さな群れであるのではない。私たちは孤軍的な存在でも、天上に万軍が共に進んでいる。

「旺んなるかな、この使徒的信仰の群れよ」

という。皆さんは、使徒的信仰のこの群れは熾んなる群れであります。姿こそ小さいかも知れないけれども、これは原始力を持っている。霊子力を持っている。この霊子力を持っているところの皆さんは、全世界をひっくり返すところの、天下をひっくり返すところのものが、あなた方の胸三寸の中に内住している。絶対にそれ以下ではない。そういう事態を――創価学会が盛んであろうが何であろうが、何をというんだ、絶対に。それは、もう次元と桁が違うのでありまして、そこにただ、もし安住していたならば、その聖霊はどこかへ行ってしまう。聖霊は発動していくものである。聖霊は流れていくものである。聖霊はどこまでも――「歌いつつ歩まん」という――進んで止まざるところの、

「今日も明日も次の日も我は進み行かざるを得ず」

というのは、今、聖霊のキリストが私たちに、

「かくお前たちと一緒に前進の他なにものもないぞ。地の極までも世の末までも進んで行くぞ」

と。私はあなた方よりも長生きしようと思っている。それはまぁ、冗談ですけれどもね。私たちの中に、

「私は明日仆れても死にません」

というものが、皆さん本当に澎湃として、

「我を受くる者は死すとも死せず、永遠に生くるなり」

と、キリストがヨハネ伝の中で約束しておられる。キリストの言葉、全くそのままです。

ヨハネは「信仰」という言葉をあまり使わなかった。よかったです。ヨハネはよく使わなかった――またヨハネ伝の中にも出てくるけれども――むしろ、ヨハネはヨハネらしき表現をしてくれてよかった。もし、ヨハネも一緒に、パウロと同じように、

「信仰、信仰」

ばっかり言ったら、それは困るよ。ヨハネは「愛」という面で、見るとか、聞くとか、愛するとか、触るとか、非常に具体的な、感覚的な言葉でものを言っている。それとパウロの「信」とはもう、一つなんです。だから、言葉に捕らわれてはいけませんよ、ということ。本当にそうですね。「信」も「見る」も一つです。

「信ずる」とは「まことをする」ということ。

「神をまことをする」

と、その「まこと」がこの中に入ってくる。神の言・行を誠（まこと）とすれば、即ち、言が私の中に成るから、皆さんの中に成るから、それが「神の誠（まこと）」「キリストの信」という。キリストの「信」、「誠」が私たちの中に入って来る。それを体見する、身体で見る。

「ああ、私の中にキリストのまことが入った。キリストの信が入った。キリストが神に全托して、ゼロ・イコール・無限大といった質のものが私の中に入ってきた。というのは、わが身体でもって、それを見るじゃないか」

と。もう、これはみんなピタリ一つなんです。

こういう自由闊達な把握は、西洋人にはできないんですよ、我々日本人でなければ。

「福音の最後のところの一番深い把握は、我々日本人に課せられたものである」

ということをはっきりと自覚してよろしい。ヨーロッパの学者は勉強はしますよ、研究はしますよ、もの凄い著作はしますよ。組織的なものは書きますよ。書かしておけばいいですよ、いくらでも。そんなものでもって、こっちが何かエラク驚いてしまって、そっちの方がよく聖書が分かっているかと思う。冗談言ってはいかん。もう、学者自身がそんなことを言って、今ごろ気が付いている。バルトもいつか、

「自分たちはまだ使徒たちのあの驚くべき霊的現実の手前にある」

とまで言っている。情けないです。ところが、最高最深最大のものは、万人に開示されている。誰にも。無学の凡人（ただびと）に。無学にして凡人なる者に、というんだ。

●キリストの名によりて

キリストの福音は、聖霊という驚くべき土台が据えられなければ、いかに神の子キリストといえども、福音を語ることができなかった。それは事実、福音書そのものが証明している。福音書は、みな始めに書いてある、そのことが。ちょっと見ましょう。

ヨハネの洗礼を受けようと思って、キリストはやってきた。

「16 **イエス、バプテスマを受けて直ちに水より上り給いしとき、視よ、天ひらけ、神の御霊の、鴿のごとく降りて己が上にきたるを見給う。**17 **また天より声あり、曰く『これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり』」（マタイ3・16～17）**

いかに生まれが神秘的な生まれをし、聖霊によってマリヤが身ごもって、不思議な子供でありましても、これを本当に、彼が直々に体見し、身体でもって見たてまつり、神と深き御霊をもってこそ、神との交わりがあったんです。

「我と父とは一つなり」

ということの、なぜ一つであるかというと

「御霊が一つにしたんだよ」

と。そうして、荒野に導かれて、今度はサタンという同じ霊的な野郎がやってきて、そして、キリストを誘(いざな)おうとした。その時に、キリストはどこまでも、この御霊において、御霊にあって、神の権威をもって、神の前に平伏して、そして、このサタンを撃退した。御霊がキリストの中に充満しても、キリストは、神さまを抜きにして

「私は霊的人物である」

なんてやったら、これはキリスト自身がサタンになってしまう。絶対にこれは違う。それは常に交流する。交流して還流しているんだ、聖霊が。

かくして、キリストは止むに止まれずして、押し出されて、伝道に立ち至る。もうはっきりしている。彼は天国そのものだから。

「汝ら、悔改めよ、天国は近づいた」

と、この権威ある言葉は天国体、天国そのものを持っているキリストでなければ言えない。天国そのものを持っていらっしゃるキリストであるから、

「汝ら、悔改めよ、心を翻(ひるがえ)せ。天国は近づいた」

と。これから、キリストの権威ある言葉と、驚くべき真理と、また、力ある業とが次から次へと展開していった。キリストの福音は、すべての言葉は、すべての業はみな聖霊から発している。あまりにも明瞭なことなんだけれども、これを実は忘れる、一般のキリスト教の世界は。

使徒行伝の先程のところで、パウロがでっくわしたご連中は聖霊のあることも知らない。水のバプテスマは知っているけれども。パウロが、「バプテスマ」という時には、そこに水を使おうが何を使おうが、それは、聖霊のバプテスマの他の何ものでもない、「キリストの名によりて」と言うときには。この

「キリストの名によりて」

が、申し上げているとおり、借りものの名じゃダメですよ。キリストの名が我々の中に本当に化体して刻まれていなければ、「名によりて」ということは言えない。私たちは、キリストの名が本当に化体しているということは、聖霊が来てなければ、キリストの名は化体しない。御霊が来てれば、キリストの名が化体していたら、「聖名によりて」と言う時に、これは聖霊から発していますから、本当にそれが――観念的に「聖名によりて」なんて、ちょっと刺身のツマみたいに付け加えるのは、そんな祈りじゃないですよね――刺身の一番大事なところ、トロかなんか知らんけれども、これが「聖名」というものです。「聖名によりて」と言う時に、今までの祈っていたことが、この

「聖名によりて」

という一句でもって、祈ってたことが全部生きてくる。この一句がなかったら、祈りが祈りでなくなる。この「聖名」というものが、その祈りを貫いて、支えて、そして執り成して、神さまに持っていくんです、この「聖名」が。イエス・キリストの聖名が。我々の悲願で

はどうにもならない。それが、霊願となるためには、キリストの聖名が、私たちの悲願を霊願として神さまに執成（とりな）してくださる。

●聖霊の突破

これが即ち、パウロがここでもってでっくわしたところの、聖霊のバプテスマの事態です。私は、今日、「聖霊の突破」と題した。

神の歴史は、創造から終末の新天新地に到るまで、これ突破また突破であります。

「光、闇より照りいでよ。光あれ」

と言えば、光が闇を突破して、貫いて、そして闇の世界を光に変えるんです。この電気を消すと、闇になるよ。ところが、この電気を点けると、電気の光というのはそこにだけ凝集していない。電気の光というのは、ウワッーと闇を照らして、闇を光の世界にしてしまうじゃないですか。もう闇じゃない、今まで闇だったのが。どこまでが闇だったか、なんて。全部、闇だったのが、今度は全部、光の中に入ってしまう。光を防いでいるこのけしからん壁は、その後ろに影を宿す。そういうわけでありまして、私たちには、もう事実が証明する。闇は光を防ぐ。聖霊を防ぐやつは、それはその中には来ないよ。聖霊を防ぐ扉を持っているというと、中はいつまでたっても暗黒で、観念クリスチャンだ。しかしながら、聖霊の光を入れようと思って、これを開け放てば、それはもうもちろん、我という闇を我という光に変えてしまう。この空間が今、光の空間である。その代わり、電気を消せば、聖霊を消せば、聖霊が消えたらば、これはたちまち闇となる。

「聖霊を消すな」

とパウロも言っている。危機的存在ですよ、我々は。安心なんかしてられません。聖霊を消したら闇になってしまうんだから。しかしながら、私たちの中にキリストを受け常に聖霊を消さないものがある。それは何か。聖霊を消さないものは何ですか、皆さん。祈りという油であります。祈りという油が、これが聖霊を消さない。祈りのある所には聖霊は消えない。

「私はもう聖霊のバプテスマを受けたから、もう大丈夫だ」

なんて、冗談じゃない。その次の瞬間には、ガタリだ。ちょっとペテロが聖霊を受けたようだったね、一時。

「汝は神の子キリストなり」

なんて言った、神の光に照らされて。キリストは非常に、正直ですから、喜んで、

「お前は、これは血肉が言ったんじゃない。神の示しによる。お前の上に教会を立てるぞ」

なんてな、まぁ、ああ言ったか言わないか知りませんが、それくらいに、キリストはとにかくその時に、御霊の光に転向せられたところの、このペテロを文句なしに喜び給うた。

すると、その次には、ペテロの中に闇の霊がくっついているものだから、

「どうかそんな十字架にからないでくださいよ」

なんて、袖引きとめた。

「サタンよ、退け！」

と、今度は、闇の世界に向かってキリストは、「サタンよ！」と言った。イエス・キリストは、もう実に事態をはっきりとご覧になって、人間をレッテルでもって見ていないわけです。しかし、イエスは、どんなにそれが烈しい言葉であっても、みなこれを救いにもたらすための、すべて深い愛なのであります。

「しょうがないペテロだな。しかし、今に、お前の中に聖霊が来たら、本当にお前は使徒になるぞ」

と。しかも使徒の大黒柱に。あの波のようなペテロを、ついにそのようにキリストはちゃんと先を見ていたわけです。

「お前は三度私を否むぞ。いいよ。しかし、今に、私が向こうに行ったならば、慰め主をお前に与えてやる」

と。ヨハネ伝14章の、

「助け主、慰め主を与える。本当に代弁する者、また、代わりに立つ者をお前に与える。そうしたらば今度は、お前たちは私と本当に近くなるぞ」

と。遠ざかって近くなるものは、キリストであります。

御霊は、正に私たちは頭で解釈するのではない。ただ心で受けるのでもない。魂の祈りで、我々の魂の祈りで、神さまの魂であるところの御霊を受けとる。そして、その魂の祈りは魂の呼吸である。我々の魂が神に向かって呼吸している限り、聖霊は消えない。どうですか、うれしいね。

●十字架の突破口

それでは、その聖霊の、我々が壁にしているものは何か。「自我」というやつが、この壁を造っている。その壁を突破する。創造の神さまは、この光をもって、力をもって、この闇の世界を光に変えつつ展開して参りまして、そして、ここに驚くべき人類の創造を為す。創造は、突破の業である。この神の創造の業は、新天新地が来るまで――創造の業はただ一回じゃない――不断に繰り返される。我々がこの地上に現れて来たのも、神の創造の業の突破であります。第一の誕生も、そのようにして突破されて来たけれども、私たちが第二の誕生をさせられる。第二の誕生日としてはっきり覚えることのできる人もあるし、できない人もあるけれども。

「私は本当に御霊のバプテスマを受けてガラリ変わりました」

とはっきり言える人もあるし、

「いつだか知らないけれども、生まれてしまって変わりました」という人もあるでしょう。どっちでもいい。とにかく、確かに今までとは違ってきたと。段々、変質変貌されつつあるんですよ。そのかわり、これに大胆に正直にぶつかって行くことです。

それがみな、キリストの、神の御霊の創造の業、突破の業として来り、そして、一番決定的な突破の業は、この御霊が私たちを貫くところの業である。

「その御霊が私たちを貫く、その突破口は何であるか」

といえば、言うまでもなく、キリストの十字架である。十字架が私たちのはっきりした突破口である。十字架は赤くしてまた金色に光る。ある時は、

「本当に驚くべき黄金色の十字架がグゥーッと自分の幻の上に立った」

と言って平伏した人があった。このキリストの十字架、これが突破することのできない、どうにもならん私たちのかわりに、本当に突破口を――

「大死一番」

なんて、ちょっと悟ったようなことを言ったってそれはダメです――本当の大死一番というのを、このキリストが十字架をもって私たちに与える。私無き、無私という、驚くべき、無私というのを私たちに与えてくださる。私たちはガラクタですよ。ガラタクの中に、無私というものがあるんですから、不思議なんです。私たちは混沌、曇りですよ。曇りの中に透明な世界がある。曇りの中に透明があり、ガラクタの中に無私の素晴らしい世界が開示される。これはキリストの十字架が私たちを突破し、担い上げてしまって突破してしまった。キリストの十字架を霊視しなさいよ。

内村鑑三先生が、

「十字架を仰げ、仰げ」

と仰った。それはそれでいいでしょう。しかし、私は今、言う。

「キリストを、十字架を霊視せよ」

と。ただ人間的な感情的な、感傷的な見方じゃダメだ。魂をもってキリストの十字架を見なさい。魂で見上げなさい。そうすれば、魂で見なければダメだよ、頭で見たって。魂で、このキリストの十字架を見上げている時に、自分が知らない間に十字架の中へ入ってしまう。十字架の中に入ってしまう。

「主と共に十字架せられたり」

とパウロが言ったのはそのことです。魂をもって仰ぎみているうちに、パウロはキリストの中に入ってしまった。十字架の中に、キリストと共に十字架されてしまった。アッシジのフランシスはスティグマを受けて、掌から血が出てきたなんていうこともあるけれども。そのように、十字架が私たちに本当に印せられる。

「もはや十字架の印を帯びたから煩わすな」

とパウロが言った。そうしたらば、どうですか。贖って自由にした魂を、キリストは空っ

ぽにしておかない。

「そうか、お前はこのように私のこの愛を受けたか」

と。贖いは愛です。愛の贖いです。私たちを、神さまの創造の業からズレてしまったところの、福音の業からズレてしまったところの、神さまの業からそれてしまったところの、この私たちを回復するところの、取り戻すところの、このキリストは、絶対に他のものと比較することのできない愛である。この愛に、この十字架の愛に触れるまでは、いくら「信仰」なんて言ったって、これはダメです。そんな信仰はもうくたびれてしまう。信ずるとは愛なるキリストを受けとることである。この愛なるキリストの愛に、自分の存在が、このキリストの愛によって呼び覚まされて本当の愛が動く。いかなる地上の恋愛もこの愛にはかなわん。この愛は私たちの生命を生命せしめているところの驚くべき愛である。

●御霊の愛

「主よ、信じます」

とは何ですか。「信ずる」という言葉は躓きの言葉になる。私はこの主に愛されて、ただ

「主よ！」

と。「主よ」という叫びは何であるか。主の愛によって、愛に応えるに愛をもってする叫びが「主よ」だ。「主よ」とは愛の叫びであります。

「主さま！」

というのは、愛の叫びであります。恋人が呼ぶよりももっと素晴らしい叫びが「主さま！」という叫びであります。この「主さま！」という、「主よ」という、

「キリストよ！」

というのは、このキリストの天来の驚くべき、何ものも防ぐことのない、

「アモール・オムニア・ヴィンキット」（愛は一切に勝つ）

という、この愛。先程もお話した、サモトラケのニケーという、勝利の女神の姿は、実は、私にとっては、キリストの勝利の翼である。

このキリストの愛に対して――愛のキリストと言った方がなおいい――この愛のキリストに対して、「主さま」と叫ぶのは、もはや「信仰」というようなことではなくて、愛の応えである。

「この主イエス・キリストの愛より天上天下のいかなるものが我らを離すことができるか」

と、パウロがロマ書8章の終わりで絶叫しています。あの

「信仰、信仰」

と言ったパウロが、愛を絶叫しています。コリント前書13章でもそうです。あの愛は、絶対にキリストの御霊の愛であって、その他の何ものでもない。

そして、御霊は愛の中に、いわゆる信仰の中に、望みの中に溶け込んでなくてはいかん。塩はどうであるか。海の水を見たときに、塩は見えますか。見えない。塩は完全に水の中に溶けているときに、塩は塩の効力を持っている。塩が固まっていたらダメですよ。自分の姿がないときに、海の水は本当に塩辛いのである。そして、一切の腐敗を全部飲み込んでいる。清濁合わせ呑んで、本当にそれを腐らざるところのものにして、太陽の光との交わりにおいてしょっちゅう展開して、何と不思議な素晴らしい、生命を与えるところの水となるじゃないですか。私たちの一切の現象の中に御霊が溶け込んでいる。だから、私は

「御霊」

なんて言わなくたっていいんだよな。本当に聖霊が溶け込んでしまって、それが愛となり、それが、あるときは信となり、望みとなり、あるときは智慧となり、あるときは力となり、あるときは学問となり――何でもいいよ――事業となる。それは、全部、御霊が溶け込む。御霊が真に一切のものの中に溶け込んで進んでいく。

それが、この御霊が、もう、ほとんど結論的なところでありますけれども、最初に語ったところの、大和をもたらすものである。

「世界連邦」

ということを一生懸命でやっている。私もその「世界連邦」の会員の一人だ。政治的なやり方をやることは、それはそれでいいさ。けれども、営む者は人間であって、その中に溶け込んでいるところの各員の中に、このキリストの聖霊の愛が、御霊が溶け込んでいるときにこそ、もう一切のものを溶かしてしまう。それが、神さまが言ったところの、キリストがおっしゃったところの、キリストの発した最大な言葉は、文句なしにあの言葉だと思う。

「45**これ天にいます汝らの父の子とならん為なり。天の父はその日を悪しき者のうえにも、善き者のうえにも昇らせ、雨を正しき者にも、正しからぬ者にも降らせ給うなり。**46**なんじら己を愛する者を愛すとも何の報(むくい)をか得べき、取税人も然(しか)するにあらずや。**47**兄弟にのみ挨拶するとも何の勝(まさ)ることかある、異邦人も然するにあらずや。**48**然らば汝らの天の父の全(まった)きが如く、汝らも全かれ。」（マタイ5・45～48）

とは何であるか。これが、聖霊が来なければ、そのような驚くべき、全宇宙を包括するような全(まった)さというものは出てこない。小さな純粋ではありません。私たちの中に、澎湃として来るところの御霊は、そこらで提唱されているような御霊じゃない。実に、原始福音において発し、使徒達において本当に現象していたところのものに、今、私たちは、この使徒の現実を今日も明日もと進んで行くのであります。

おわります。